

原始仏教における人間存在の問題

—— スッタニパータを中心として ——

中村了権

「仏教は人間学である」という観点にたつて、仏教における人間存在の問題を考察した場合、それは自ら存在自体の問題をはじめ、存在そのものの解脱の問題にまで及ぶものである。

「生存を構成する諸要素の認識をよくするならば、かれは世の中に正しく遍歴するであろう」と生存への考察が重視され、いわゆる存在の仕方そのものの認識の確立が強調され、如実なる人間存在の状態性とは「……この状態からあの状態へと執着して、輪廻を越えることがない」と把握られ、「執着に縁つて生存が起る」と解釈されている。すなわち存在の仕方を「執着せるもの」と認識されているのであるが、それはさらに「苦受としての生の輪廻」であり、その存在状態は「はかりしれない迷妄・虚妄性の運動」と「はかりしれない煩惱の活動」を展開しているのである。

このような存在における諸活動が生起する構造的理論とはいかなるものか。それは「どんな苦しみが生ずるのでも、すべて素因に縁つて起るのである……」といつて無明・形成力・識・接触・感受・愛執・執着・起動・食・動揺という存在の活動をあげることによつて生存を構成する諸要素を明確にしているところにもみることができ、いわゆる存在の諸活動は、このような生存構成の諸要素におけ

る活動が縁起的に展開されることによつて生起すると解されるのである。また、有情における煩惱行為の発生原因は何であるかという問題を設定して、それは「愛し好むものにもとずいて起る」といいその「愛し好むもの」は「欲望を縁として起る」、「欲望」は「世の中で〈快〉〈不快〉と称するものに依つて……起る」、「快と不快」は「接触を縁として起る」、「接触」は「名称と形態に依つて……起る」といい、「諸々の執着は欲求を縁として起る」ことを明し、それを意識活動の面から把握して「世界は、六つのものに執着しており、世界は六つのものに害われている」と、ここに「六入」によつて把握されるそれぞれのものに執着するという意識活動の状態性が指摘されている。これを十二支縁起思想体系に相応して整理すれば、有情の生存「有」の執着活動は「名色_↓六処_↓触_↓受」という関連の中にあつて展開し、ここに接触と感受の活動が生起され、「愛_↓取」の活動が成立、「生」の必然の中にあつて執着の生起がもたらされるといえる。それは「無明」者たるものであつて、その「行」の全体は煩惱に充滿した汚濁の業を繰返し、そこには「生」の迷妄・虚妄性と苦惱性が生ずるのである。これは、まさに「惑・業・苦」という三道論の觀念を含むものといえ、存在の諸活動における具象性を把握した執着の思想とみることができ、

原始仏教聖典では、存在の諸活動における「悪の活動」面と「善の活動」面の指摘を相応させる表現法によつて、存在の「惑・業・苦」の状態性の描写を多く行なっているが、それらによれば執着活動は罪悪行為であつて、しかもそれは地獄の状態と交渉をもつものとされている。すなわち執着せる者としての存在における三道論的展開は、深淵なる地獄の世界と交渉をもち、それはまさに無限の罪

悪行為の展開をもたらしているとみるのである。ここに執着活動生起の論理から罪惡即地獄の論理を発見しうるわけであるが、執着の思想はすなわち存在の諸活動における「悪の活動」の指摘によつて構成され、存在のあり方が「いかにあるか」を探求し、顕現したものである。

次に解脱の問題について「上にも下にも横にも中間にでも執着する妄執を悉く去れ」といい、ゴータマ・ブツダをさして「執着の住所をすて、愛執を断ち、悩み動揺することなく、歓喜を捨て、激流をのり超え、すでに解脱し、はからいを捨てた賢明な……」と呼びかけ、また「この世で一切の罪惡を離れ、地獄の責苦を超えて策励する者、精励する賢者……」などといつてゐる。つまり、「執着の断」・「煩惱の断」・「地獄と罪惡からの解放」が強調され、無執着と煩惱断の論理で解脱が概念づけられている。「執着の網を超えた人——かれは《聖者》である」ということを根本に執着との断絶が解脱にかかりをもつとされるもので、これは執着の思想に対する無執着の思想と考えられよう。無執着の状態が解脱の境地と具体的なかわりをもつ有効なものであることは原始仏教聖典に多く示されているが、執着を断ずることによつて、幸福・平安・安楽・清浄の境地・最上の富・ニルバーナの境地などが得られることを明しているでは、「執着の断」をたてまえとする解脱への実践道はいかなるものか。それは、出家者と在家者に区分されて確立されている。出家者に対しては、「問」↓「聞」↓「帰依・信」↓「出家・具足戒」↓「解脱」という実践体系が確立されている。これに対して在家者の実践体系は、「問」↓「聞」↓「帰依・信」↓「受戒」↓「在家信者」↓「生天・解脱」というものである。

原始仏教における人間存在の問題（中村）

「問」↓「聞」↓「帰依・信」という実践過程は、出家者も在家者も仏教にかかりをもつ必修条件として同じであり、「帰依・信」のち完全な具足戒を受けるか、五戒を受けるのみでおわるかによつて両者の実践道は分れるのである。そこで、この「問」から「聞」にいたる実践過程の問題であるが、「聞」は存在の中から必然的に発生する深淵な「問」から成立つものである。たとえば「賤しい人の条件は何であるか」「いかなる道徳あり、いかなる行いあり……」「柔和な人とは、目ざめた人とは、賢者とは……」というように、この「問」から必然的に「聞」の実践が可能になつてくるのである。「問」に相応した真理が「聞」かれ、その了解が完了するところに「信」の世界が確立され、その「信」の世界の内相は、三宝への帰依であつて、これは出家・在家を問わず仏教にかかりをもつ者にとつての実践の基調である。すなわち「……いかなる行為を増大せしめるならば、最上の真理に達し得るであろうか」という「問」に対して「……みごとに説かれたことを謹んで聞け」「……かつ実行せよ」ということが強調され、「問」と「聞」の実践が宗教生活の出発点とされている。「問」から「聞」という過程を経て教法が明らかになると、そこに「聞法者」の「帰依・信」という宗教の世界が開け、完全な具足戒を受けたものは出家者となり、五戒を受けたものは在家信者となる。かくして「問」と「聞」はブツダに対する『聞法』であり、「帰依・信」と「具足戒」または「五戒」は『行』であり、「解脱」または「生天・解脱」は『証』であるとみななければならない。（註を略す）